

# 大宮売神社所蔵資料の活用 —「ミニチュア土器をつくってみよう」の実施—

川崎 雄一郎

## 1. 概要

2016年8月1日に京都府立大学と京丹後市丹後古代の里資料館の共同企画として、ミニチュア土器製作体験会を実施した。体験会では、陶芸用粘土を使用し、古代の祭祀具であるミニチュア土器を製作した。体験会で製作したミニチュア土器は後日資料館で焼成し、各自記念に持ち帰ることとした。企画と体験会の進行を京都府立大学が担当し、広報及び会場の準備、土器の焼成を古代の里資料館が担当した。体験会への参加は事前予約制とし、対象は小学生とした。更に小学3年生以下の児童には保護者の同伴を義務付けた。当日は11名の児童が体験会に参加した。参加者は主に京丹後市在住の小学生であったが、市内に親の帰省先がある児童の参加もあった。また、兄弟での参加もあったため、幼稚園児も1名が参加した。

体験会の大まかな内容は以下のとおりである。

- 13:00～ はじめに（挨拶）
- 13:05～ 事前学習1（古墳時代について）
- 13:15～ 事前学習2（古墳時代の生活について）
- 13:25～ ミニチュア土器製作体験
- 14:50～ まとめ・振り返り
- 15:05～ 記念撮影・自由見学

当日、企画の進行にあたったのは京都府立大学考古学研究室所属の学生8名である。（）内は当日の役割および担当キャラクター。

川崎雄一郎（司会）、中村彰伸（土器製作指導：古墳時代人）、近藤史昭（土器製作補助）、縄手晴日（土器製作補助：古墳時代人）、新尺雅弘（進行：しんじゃく君）、寺岡潤一郎（解説：こふんはかせ）、土田雄大（解説：はかせの助手）、陰地祐輝（土器製作指導）



写真1 事前学習2 古墳時代人の登場



写真2 ミニチュア土器製作体験

## 2. 実施の背景と目的

京都府立大学歴史学科では、京丹後市からの提案をうけ、大宮町周枳に所在する大宮売神社所蔵資料の整理と公開を進めてきた。2014年に市制10周年記念事業の一部として大宮売神社の展示をリニューアルしたのを始めとし（京都府立大学考古学研究室ほか2015）、2015年からは京都府立大学地域貢献型特別研究（ACTR）の事業として資料の記録・整理・研究を本格的に開始した（向井2016）。今回の企画も京丹後市と共同で進めている平成28年度京都府立大学地域貢献型特別研究「京丹後市域の考古資料を中心とした文化遺産の整理と活用」（代表：向井佑介准教授）による研究成果の一端を地域に還元する目的で実施したものである。

大宮売神社が所蔵する資料で注目すべき資料に、5世紀前半から6世紀後半の祭祀遺物がある。これらは境内から出土したものであり、多数の手づくねのミニチュア土器を含む（京都府立大学文学部考古学研究室ほか2015）。ミニチュア土器は京丹後市内の同時期の遺跡からも出土しており、神社成立以前の当該地域の信仰を考える上で重要な資料である。さらに、一部のミニチュア土器には製作時の痕跡が明確に残されており、製作技法の復元も可能である。

そこで、今回の企画では、大宮売神社境内出土のミニチュア土器を、製作体験を通して理解するという目的を設定した。ただし、現時点でミニチュア土器の使用用途が明らかでないため、今回は参加者と共にミニチュア土器の意義を考えることとした。

また、全体の目的とは別に、企画の進行段階に応じた小目的をいくつか設定した。まず、事前学習ではミニチュア土器が製作された時代背景を神明山古墳や復元竪穴建物など、京丹後市の事例をもとに理解することを目的とした。続く製作体験では、実物資料の観察から製作技法について考え、実際の製作体験を通して技法を理解するという目的を設定した。そして、最後の、まとめ・振り返りのパートでは、実際に製作を体験した感想を元に、ミニチュア土器がどのようなものであったかという点について考えることとした。

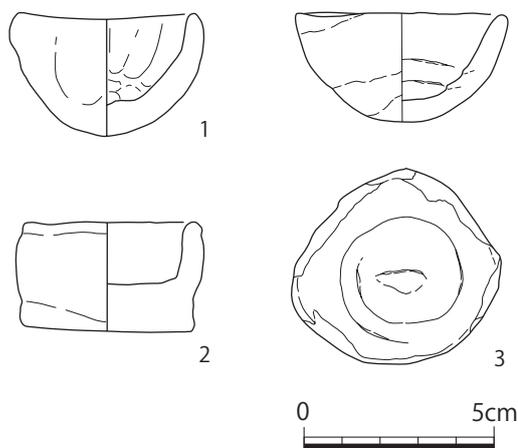


図1 大宮売神社出土ミニチュア土器  
(縮尺 1/2)



写真3 底部外面の葉脈痕

### 3. 体験会の準備

体験会の実施にあたって、事前に勉強会と企画会議を複数回おこなった。勉強会では、これまでの調査成果の整理や古墳時代の祭祀、京丹後市の古墳などについての学習をおこなった。企画会議では、勉強会の内容を踏まえて、体験会の目的設定や進行方法、解説内容を検討した。検討内容の詳細は次節に記載する。

また、企画会議では実測図をもとに製作技法を検討し、実際に製作実験をすることで製作モデルの選定と製作技術の習熟につとめた。製作のモデルには図1に掲載した3点を選んだ。図1-1は粘土塊を指で押し広げる技法で成形される。図1-2は円盤状の粘土板の縁に沿って粘土紐を巻き上げる技法で成形される。この2つの技法は比較的簡単であるため、参加者全員がこの2つの技法でミニチュア土器を製作することを目標とした。図1-3は手に持った粘土紐を底部から一気に巻き上げることで器体を成形する。この技法は他の技法と比べてやや難度が高い。そのため、高学年の児童にのみ指導することとした。さらに、図1-2の技法で製作する際は底部となる粘土板の下に木の葉を敷くこととした。これは、大宮売神社のミニチュア土器には底部外面に葉脈の痕が残る資料(写真3)があり、製作時に使用した道具を理解する事例として適切であると考えたためである。

体験会の1週間前には会場の視察と進行のリハーサルも実施した。リハーサルは、歴史学科の教員の立ち会いのもと実施し、企画の内容や進行方法に関する指導を仰いだ。

### 4. 進行にあたっての工夫

今回の企画で最も重要な点は、良質な実物資料が地元の神社に残っており、その観察が可能であるということである。そのため、神社から借用したミニチュア土器を観察し、製作技法を考える時間を設けた。ただし、体験がはじまると資料の汚損を避けるため、実物資料を出せなくなる。そのため、学生がカメラで撮影した映像をスクリーンに投影しながら製作体験を進めることとした。

次に、体験会の参加者が小学1～6年生までの児童であるため、学年によって参加者の能力に大きな差が生じることが想定された。そのため、学年の異なる参加者が平等に企画を楽しむための工夫が求められた。

最も優先させたのは、小学校低学年の児童でも内容を理解できるようにするという点、また、普段馴染みのない歴史または考古学の内容にいかに関心を抱かせるかという点である。計画の初期段階では、イラストや写真を多用すること、また平易な言葉を用いて説明することを心掛けた。ただし、それでもまだ、小学校低学年の児童には馴染みのないテーマであるため、教員からの助言をもとに企画全体にストーリー性を持たせ、寸劇を交えながら体験会を進行することにした。ストーリーは、進行役である「しんじゃく君」というキャラクターと一緒にミニチュア土器の謎を解いていくというものである。事前学習的な内容の解説は「こふんはかせ」や「はかせの助手」といったキャラクターが担い、土器製作体験は古墳時代の人々が現れて作り方を教えてくれるという設定で進行した。さらに、寸劇の完成度を高め、児童らが物語に入りやすくするため、キャラクターごとの衣装も準備した。特に古墳時代人を演じるために古墳時代風の

胡服と巫女服を製作した。製作にあたっては、大阪府立近つ飛鳥博物館が体験用に製作したものを参考にした（大阪府立近つ飛鳥博物館 2000）。また、製作体験時には、学年による能力の差をできるだけ少なくするため、児童 2 人に対し学生 1 人が指導にあたることとした。

以上の工夫に加え、高学年の児童が共に楽しめる工夫も考案した。低学年の児童がいるため、解説内容を高度化することは不可能だが、学校教育では扱わない考古学に関する内容を盛り込むことや、資料館に隣接する復元竪穴建物を実際に見学することで、高学年の児童にとっても新たな知見が得られるよう配慮した。また、ミニチュア土器の製作体験も全参加者向けの低難易度の技法に加え、高難易度の製作技法も追加で指導することで対応することとした。

#### 4. 総括

計画段階での予想の通り、当日は幅広い年齢の児童が参加した。そのためストーリー性をもたせた体験会の進行は適当であったと考えられ、キャラクターからの問いかけに対する反応も良かったように思う。ただし、急遽、寸劇を交えた進行に変えたことで、物語への引き込みや時間配分などに不十分な点が多々見られた。また体験会の重要な要素であった実物資料の観察がストーリーの進行上、一部省略せざるを得なくなったことが大きな反省点としてあげられる。

ミニチュア土器の製作体験については、当初の予想を大きく上回り、全ての参加者が時間内に目標である 2 タイプのミニチュア土器の製作を終えることができた。余裕がある児童はそれぞれ、飾りや模様をつけたオリジナルのミニチュア土器を製作する様子もみられた。製作体験を通して、自ら粘土をこね土器を作り上げるという行為自体を楽しむことができた点は体験型の学習成果として評価できる。

最後のまとめ・振り返りのパートでは、参加児童に「どのようにミニチュア土器を使ったのだろうか」という質問をした。難しい質問ではあったが、児童らからは、普段目にする食器との類似から「たべものを入れてお供えしたのではないか」という答えが出された。本企画の最終目的であるミニチュア土器の意義を理解するという課題に対して、児童らなりの答えを見つけたという点で体験会の目的は達成されたといえる。

以上のように、企画の進行に改善の余地はあるものの、企画全体としては概ね成功であったと考えられる。これまでおこなってきた大宮売神社所蔵資料の調査成果の還元を、今回のような小学生向け体験プログラムとして実施出来たということは、今後も調査活動、または成果の活用を継続していく上で重要な成果であったと考えられる。

#### 参考文献

- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2000 『大阪府立近つ飛鳥博物館事業報告 1 平成 11 年度事業「古墳・飛鳥人になりきってみよう」実施報告書』
- 京都府立大学文学部考古学研究室・中世史研究室 2015 「大宮売神社の資料調査と展示」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第 1 号
- 向井佑介 2016 「大宮売神社遺跡出土遺物の調査」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第 2 号